

震災を乗り越えて世界選手権へ

スウェーデンでのスキーオリエンテーリング世界選手権にむけて出発する一週間前に、日本選手団10名の生活は激変を余儀なくされた。日本は過去最大規模の地震におそわれ、日本代表選手たちがスウェーデンに向けて出発できるかどうかは確実なものではなくなった。

—電話もインターネットも通じず、日本代表のすべての選手と連絡が取れ、全員が無事であると確認が取れるまでにほぼ4日かかりました。日本のトップクラスである堀江選手は以上のように語った。



震災を乗り越えて世界選手権出場を果たした日本チームの一人
左から、渡辺幸、黒田幹朗、堀江守弘

日本が大震災に襲われた時点では、遠く離れたスウェーデンで開催される世界選手権に向けて出発することは最優先事項とは考えられなかった。しかも、代表選手の半数は被災地の近く、本州北部の山形に住んでいた。—大会に向けて出発するかどうか、もちろんかなりの議論になりました。でも、日本で起こったことを現地で伝えるためにも、と最終的には参加を決めました。(堀江選手談)

移動手段や旅程は変更を余儀なくされ、出発の空港も変更になった。それでも、日本選手団はヘリエダール山地、テンダーレンに向けて大会の数日前に日本を出国することができた。団長の武石氏が現地について最初にしたことのひとつは日本に向けて義捐金のお願いを他国の参加選手に伝えることだった。大会期間中に各国通貨でかなりの義捐金が日本選手に渡された。

—日本で起きた災害について伝え、義捐金を集めることが今回の参加において重要な点のひとつでした。日本に戻ってからは長期にわたる日本経済再生に向けて働き、電気を節約する生活が待っています。堀江選手はこう語り、さらに東京にある自身の職場について例を挙げた。—日本を出発する前のことですが、職場の天井の蛍光灯の数を数え、も

し一箇所に三本あった場合には、そのうちの一本を外すなどして節電の対処をしてきました。

日本選手団には将来の期待を担う4人のジュニア選手がいる。そのうちの一人渡辺選手は17歳。原発事故のあった福島から75kmほど離れた山形に住んでいる。彼は日本勢が14位に位置したリレーの最終走者をつとめた。

—良い大会でした。ですが、日本の大会と比べると難しいです。

と、渡辺選手ほか、日本人選手は語る。

—日本で開催されるスキーオリエンテーリングの大会では、ルートを選択がそれほど難しくないことが多いです。それに対してこちらでは速度を上げての地図読みが要求されます。また、日本の大会では20人から30人以上の参加者がいることもまれなんです。

リレー第一走者をつとめ、ロングでは日本勢トップの35位に食い込んだ堀江選手は以上のように語った。

しかし、世界選手権期間中の時に嵐にも似た雪と強風を伴った激しい天気の変化は日本チームにとっては問題ではなかったようだ。

—天気はだいたい日本の冬もにたようなもの。ただ日本だとこのような天気は2月ごろに多いですかね。

放射能に対する危険性から外国人に対しては避難勧告の出されている地域に住んでいる選手も多い。しかし、予想される食料品や水など生活必需品の不足にもかかわらず、選手たちは大会後の滞在期間を延ばして帰国を遅らせようとは誰も口にしない。

—いまこそみんなの力が必要とされる時。日本に着いたら日本の経済を支えるためにも今まで以上に働くつもりです。

と、堀江選手は語った。



日本チーム団長 武石雄市氏は喪章を付けた日本国旗を掲げ、被害者のための義援金を集めを行った。